

# 史跡木嶋坐天照御魂神社 (蚕ノ社) 境内

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 史跡木嶋坐天照御魂神社 (蚕ノ社) 境内

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび消防用防火槽設置に伴います史跡木嶋坐天照御魂神社（蚕ノ社）境内の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます次第です。

平成14年12月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 史跡木嶋坐天照御魂神社（蚕ノ社）境内
- 2 調査地点所在地 京都市右京区太秦森ヶ東町 史跡木嶋坐天照御魂神社境内
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 榊本頼兼
- 4 調査期間 2002年9月2日～2002年11月19日
- 5 調査面積 118m<sup>2</sup>
- 6 調査担当職員 調査担当 高橋 潔 （担当係長：吉村正親）  
補 助 上村和直・山本雅和・近藤知子・本田憲三  
写真撮影 村井伸也・幸明綾子  
基準点測量 宮原健吾
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」「花園」「太  
秦」「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系 （ただし、単位（m）を省  
略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 土 壌 色 名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準  
じた。
- 12 遺 構 番 号 検出した順に通し番号を付し、遺構の種類と記号を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 本書掲載の順に通し番号を付した。
- 14 年 代 観 平安時代以降の土器の年代観はおもに、小森俊寛・上村憲章「京都の  
都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）  
京都市埋蔵文化財研究所 1993年、および中世土器研究会編『概説  
中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年 に拠った。
- 15 整 理 作 業 担当職員 高橋 潔  
遺物洗浄 モンペティ恭代  
整理協力 上村和直・山本雅和・ト田健司・竜子正彦  
遺物写真撮影 村井伸也・幸明綾子
- 16 編 集 執 筆 高橋 潔
- 17 謝 辞 本調査の実施にあたっては、木嶋坐天照御魂神社宮司の神服一夫氏、  
地元太秦森ヶ東町をはじめとする自治連合会の関係諸氏の多大なご協  
力とご理解を賜った。記して感謝の意を表したい。

# 目 次

1	調査経過	1
	(1) 調査に至る経緯	1
	(2) 調査の経過	2
2	調査地の位置と環境	3
3	調査の概要	5
	(1) 調査区の設定	5
	(2) 層 序	5
	(3) 遺 構	7
4	出土遺物の概要	11
	(1) 弥生時代	11
	(2) 弥生時代後期から古墳時代初期	11
	(3) 平安時代中期以降	13
5	ま と め	14
	(1) 遺構の変遷	14
	(2) 遺構群について	15

# 図 版 目 次

図版 1	遺跡	1	泉SX 1 調査前状況 (北東から)
		2	泉SX 1 東西セクション断面 (北西から)
図版 2	遺跡	1	B区全景 (北から)
		2	泉SX 1・石敷遺構SK 3 (北から)
図版 3	遺跡	1	A区全景 (東から)
		2	C区全景 (北西から)
図版 4	遺物		出土遺物

## 挿 図 目 次

図 1	調査位置図 ( 1 : 5,000 )	1
図 2	作業開始前の現地の様子 ( 北東から )	2
図 3	調査前全景 ( 南西から )	2
図 4	調査風景 ( 南西から )	2
図 5	泉SX 1 ・石敷遺構SK 3 埋め戻し状況 ( 南から )	3
図 6	『都名所図会』の木嶋社 ( 『新修 京都叢書』第六巻より転載 )	4
図 7	地形測量および調査区配置図 ( 1 : 100 )	6
図 8	土壌SX15遺物出土状況	7
図 9	調査区平面図 ( 1 : 100 )	8
図 10	調査区断面図 ( 1 : 100 )	9
図 11	泉SX 1 実測図 ( 1 : 50 )	10
図 12	土壌SX15出土石器実測図 ( 1 : 2 )	11
図 13	弥生時代後期から古墳時代初期の土器実測図 ( 1 : 4 )	12
図 14	石敷遺構SK 3 ・泉SX 1 出土土器・瓦実測図 ( 1 : 4 )	14
図 15	泉SX 1 腐植土層出土飾り金具実測図 ( 1 : 2 )	14
図 16	遺構変遷模式図 ( 1 : 200 )	15
図 17	大正期三千分一地形図 ( 「花園」部分、1 : 5,000 に調整 )	16

## 表 目 次

表 1	遺構概要表	7
表 2	遺物概要表	11

# 史跡木嶋坐天照御魂神社 (蚕ノ社) 境内

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

調査地は京都市右京区太秦森ヶ東町に所在する史跡木嶋坐天照御魂神社の境内の北東隅にあたる。ここに京都市消防局の消防用防火槽の設置が計画された。当地は史跡内であるため、京都市文化市民局文化財保護課より事前調査を行うよう指導があり、(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を担当することとなった。

調査にあたっては、木嶋坐天照御魂神社関連の遺構・遺物の検出に主眼を置いたが、調査地の北西には弥生時代から古墳時代の集落遺跡・和泉式部町遺跡が拡がっており、これに関連する遺構・遺物の検出も予想された。

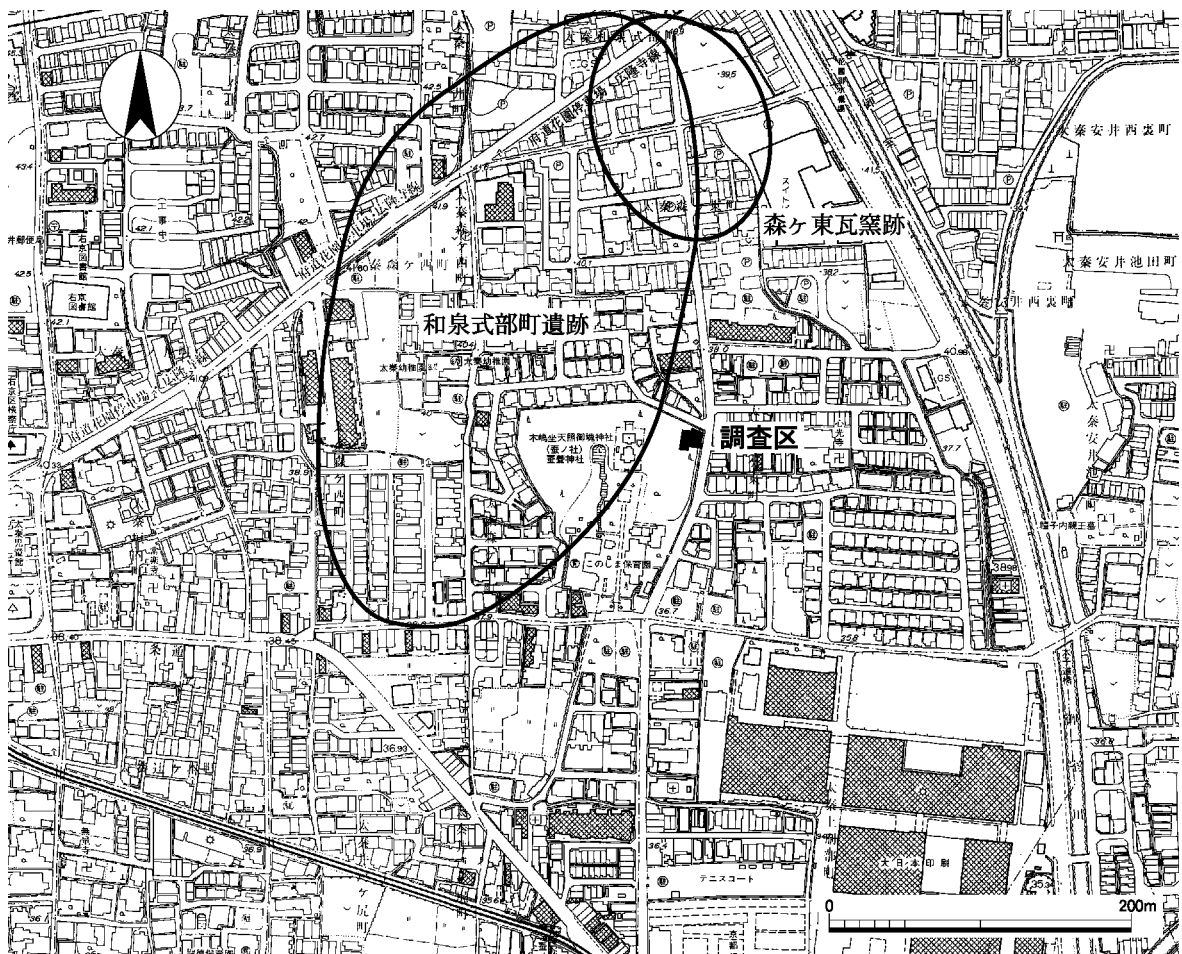


図1 調査位置図(1:5,000)

## (2) 調査の経過 (図2～5、図版1)

調査地は木嶋坐天照御魂神社の本殿を囲む森の東端にあたり、樹木が生い茂っているため、現場への出入り口を東に面した道路側に設けることにした。この道路側には既存の高さ1.8mのブロック塀があり(図2) その内側、境内東端には道路面より高さ約1.5mの土塁状の高まりが道路に沿って続いていた。したがって、まず調査を開始する前段階の作業として、2002(平成14)年9月2日より、出入り口の確保のためにブロック塀の撤去、土塁状高まりの断割り調査(A区)を行い、その後作業範囲の樹木の伐採作業を行った。



図2 作業開始前の現地の様子(北東から)



図3 調査前全景(南西から)



図4 調査風景(南西から)

対象地の伐採が済むと、現地形が顕になった。調査地の地形は先述のように東側道路に面して南北に土塁状の高まりが続き、その西は低く平坦になり、西側の本殿へ向けて徐々に高くなっている。調査範囲の南端には径約3mの円形凹み(泉SX1)があり、南に溝状の凹みが続いているのが、表土上面で明らかにわかる状態であった。

このため、調査区(B区)の重機掘削を行う前に円形凹み(泉SX1)の状況を写真撮影する(図版1-1)とともに、地形測量図を作成した。

調査区(B区)は防火槽設置予定範囲に、円形凹み部分を南へ拡張して設定した。表土(腐植土)・盛土を重機によって掘削・除去して調査を開始し、調査中の排土は一部を除き場外へ搬出して処理した。調査の前半は平安時代中期以降の泉SX1の掘下げ、石敷遺構SK3の礫面検出作業を中心として進めた。後半はそれらの実測作業と弥生時代後期から古墳時代初期の下層遺構の調査を行った。

調査区の西部で検出したこれら泉SX1・石敷遺構SK3は史跡である木嶋坐天照御魂神社に関連する遺構であることが明らかとなったため、京都市文化市民局文化財保護課の指導により現地で埋め戻し、保存することが決められた。このため防火槽の設置位置を北東へ約2mずらすこととなり、調査区を北と東に拡張することと



なった。拡張区（C区）の掘削に先立って、泉SX1・石敷遺構SK3は遺構保護のため、真砂土を詰めた土嚢袋を隙間なく充填して埋め戻した（図5）。拡張区も重機によって掘削を行い、その排土によって調査区（B区）を埋め戻した。拡張区の調査は11月5日に終了、調査機材を引き上げすべての調査を終了した。調査面積は都合118㎡であった。



図5 泉SX1・石敷遺構SK3埋め戻し状況（南から）

調査期間中、10月12日には地元向けの現地説明会を開催し約120名の参加者があ

た。また、翌13日には京都ウエストサイド物語・2002実行委員会主催の「TRY1600 - 洛西 1 day マーチ」に際して、一日現場を開放して遺跡・遺物の解説を行った。このほか随時調査成果の公開に努めた。

なお、11月7日京都市消防局によって防火槽設置後の植樹等についての検討が現地で行われ、倒木・失火などの対策として、樹木を4本新たに伐採するとともに集積していた伐採材の搬出が指示された。作業は11月18・19日の両日で行った。

## 2．調査地の位置と環境

木嶋坐天照御魂神社は丹波山地帯の末端、北山・梅ヶ畑に源を発する御室川の右岸の低位段丘面上の東端に立地している。独立峰である双ヶ岡の真南にあたり、南流する御室川に東面する。渡来系氏族・葛野秦氏が建立したとされる広隆寺の真東にあたり、同寺南門と当社鳥居はほぼ面を合わせている。古くは山背国葛野郡太秦に属した。

当社の創祀については不詳である<sup>1)</sup>が、『延喜式』<sup>2)</sup>神名帳に名神大社の一つとして挙げられており、いわゆる「式内社」として知られる。確実な記録では『続日本紀』大宝元年四月三日条<sup>3)</sup>に「木嶋神」とあるのが初見であり、少なくともこの701（大宝元）年以前には祀られていたと考えられている。

平安時代には祈雨などに際して幾度も奉幣が捧げられ<sup>4)</sup>、859（貞観元）年には正五位下に列せられた<sup>5)</sup>。また、平安時代の終わりごろには、伏見・稻荷大社や石清水八幡宮などと並んで、参拝者が絶えることのない、賑わった神社のひとつとして挙げられる<sup>6)</sup>。しかしその後、鎌倉時代には1221（承久三）年の承久の変に際して、後鳥羽上皇方の三浦胤義・胤連父子が当社に籠るが幕府方に包囲されたため自害し、のち火が放たれ社が焼亡したとの記録がある<sup>7)</sup>。この後は、江戸時代に至るまで当社についての文献上の記録は見られないようである。

本殿は現在の境内の中央北寄りの小高い場所に鎮座しており、天之御中主命、大国魂神、穂々出見命、鵜茅葺不合命、瓊々杵尊の五柱が祀られている。本殿の東には摂社・養蚕（こがい）神

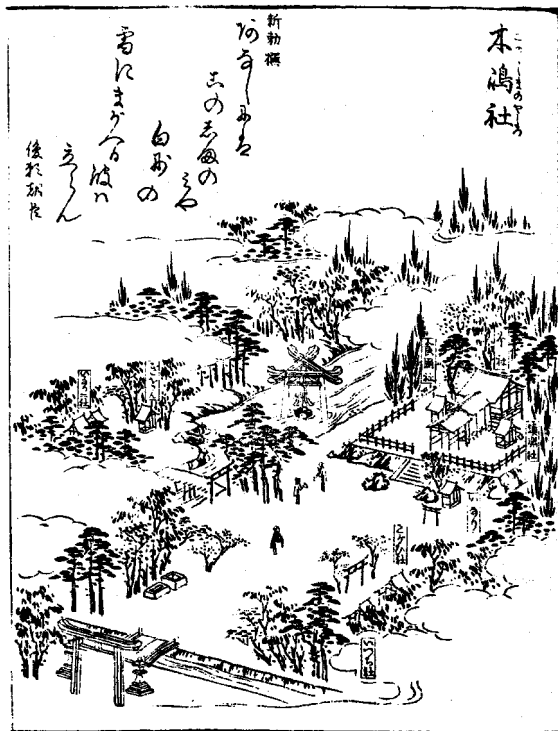


図6 『都名所図会』の木嶋社  
 (『新修 京都叢書』第六巻より転載)

社が設けられており、養蚕や機織に縁が深く、「蚕ノ社」とも呼ばれ親しまれている。この本殿の西には「元糺の池」と呼ばれる泉があり、三つ柱の石製鳥居が建っている。中央には依り代として円錐形に小石が積み上げられ、中心には御幣が立てられている。この様子は江戸時代の境内の様子を表した1780(安永九)年刊の『都名所図会』(図6)にも描かれており、泉からは蕩々と湧水があったことが窺える。この三つ柱の形態がいつまで遡るかは明らかではないが、現在の鳥居の柱には銘が刻まれており、1831(天保二)年に建て替えられたものである。現在の社殿はいずれも明治以降に再興および新たに建てられたもので、1985(昭和60)年6月1日現境内とともに「木嶋坐天照御魂神社(蚕ノ社)境内」として京都市の史跡に指定された。

次に、当社周辺の遺跡について概観する。旧石器時代や縄文時代の遺跡はあまり知られておらず、弥生時代以降開発が進められたようである。

弥生時代から古墳時代の集落遺跡には村ノ内・常盤仲之町・上ノ段町・和泉式部町・多藪町などの遺跡が当社の西方に展開する。とくに、和泉式部町遺跡は当社の西半を含んで北西方に拡がっており、1987(昭和62)年に行った発掘調査<sup>10)</sup>では弥生時代中期の竪穴住居1棟、古墳時代初期から前期の竪穴住居14棟、古墳時代中期の竪穴住居7棟を検出した。とくに古墳時代中期の竪穴住居からはいわゆる初期須恵器や韓式系土器が出土しており、渡来系の葛野秦氏の本拠と目される当該遺跡で、朝鮮半島と密接な関係を示す遺物を検出したことは注目される。

これら集落の盛行に合せて古墳時代中期末ごろから古墳が多数築造される。とくにこの太秦地域の首長系列の墓と考えられている段ノ山古墳、清水山古墳、天塚古墳、仲野親王陵古墳、蛇塚古墳といった前方後円墳、これに続く双ヶ岡一ノ丘古墳(円墳)など次々と築かれた。また、これらと同時並行的に北嵯峨丘陵の南斜面では夥しい数の小型古墳が築かれ、いくつもの群集墳が展開する。

飛鳥時代には、当社の真西の広隆寺の位置に前身寺院(広隆寺旧境内)が創建される。この寺院は葛野秦氏(秦造河勝)の建立した蜂岡寺(葛野秦寺)と考えられており、その位置が古墳時代後期の首長墓の分布域のほぼ中心にあっていることは興味深い。

奈良時代から平安時代にかけての明確な遺構は、これまであまりまとまって検出されておらず、遺跡は散布地として、西方に一ノ井遺跡、南方に井戸ヶ尻・門田遺跡が知られている。また、当社北方には森ヶ東瓦窯跡が知られている。1986(昭和61)年公共下水道工事に伴って行った立会

調査で、平安時代中期のロストル式平窯を検出した<sup>11)</sup>。

さて、当社を対象にした考古学的な調査は、本調査に至るまで行われてこなかった。1985（昭和60）年の周辺一帯で行われた公共下水道工事に伴う立会調査<sup>12)</sup>では、当社に関わる遺構・遺物の検出は見られなかった。したがって、本調査が史跡としての当社境内における最初の考古学的調査となった。

### 3．調査の概要

#### （1）調査区の設定（図7）

「調査の経過」で触れたように、調査区の地形は東側道路に沿って南北に帯状の高まり（土塁）が連なり、その西側は低く平坦な空間があって、本殿の鎮座する西側に向かっていくに従って高くなっている。調査対象部分は東の土塁とその西側の平坦面であり、調査区は調査の進捗状況にあわせて、A・B・C区の三段階に分けて設けることとなった。

A区 当初、東側道路からの出入り口確保にともなって、高まり（土塁）の土層の状況を確認するため土塁に直交するように東西約6.5m・南北約1.5mのトレンチを設けた。その結果、遺物が出土せず、時代を決定することはできなかったが、土層の状況から人為的な盛土による土塁状の遺構と考えられた。最終的にはB・C区の調査範囲と完全に重なる。

B区 作業範囲の樹木伐採作業を行い、防火水槽設置位置に合わせて一辺9mの正方形の調査区を設定した。この南西部分に円形凹み（泉SX1）の一部がかかったため、部分的に拡張して泉SX1の全体が含まれるよう鉤形に変形した。面積は約89m<sup>2</sup>である。調査区の東壁は高まり（土塁）の縦（南北）方向の断面を兼ねるように設定した。

C区 泉SX1および石敷遺構SK3が当社に関連する遺構であると判断され、現地保存が決定されたことに伴って、水槽の設置位置を当初予定よりも北東にずらすこととなった。このため、泉SX1・石敷遺構SK3周辺を土嚢で被覆保護して埋め戻した後、調査区を北の一部と東側へ拡張し「L」字形に設けた。面積は約29m<sup>2</sup>であった。

#### （2）層序（図10）

基本的な層序は、表土（腐植土層）が0.1～0.3mの厚さで全体を覆っており、その下には少なくとも二時期の整地層が認められる。いずれの整地層からも遺物がほとんど出土せず、その時期を確定できない。上層の整地層は主として黄褐色系の泥砂からなっており、調査前の地形を形成した層である。下層の整地層は褐色系の砂泥からなっており、のちに触れる石敷遺構SK3を埋め泉SX1の周囲に土手状の盛土を施すのと一連の整地である。石敷遺構SK3の存続時期が鎌倉時代前期までとみられることから、整地層はこのときに形成されたと考える。さらに下層には本来弥生時代後期から古墳時代初期の遺物包含層である黒褐色泥砂が0.1～0.2mの厚さで堆積

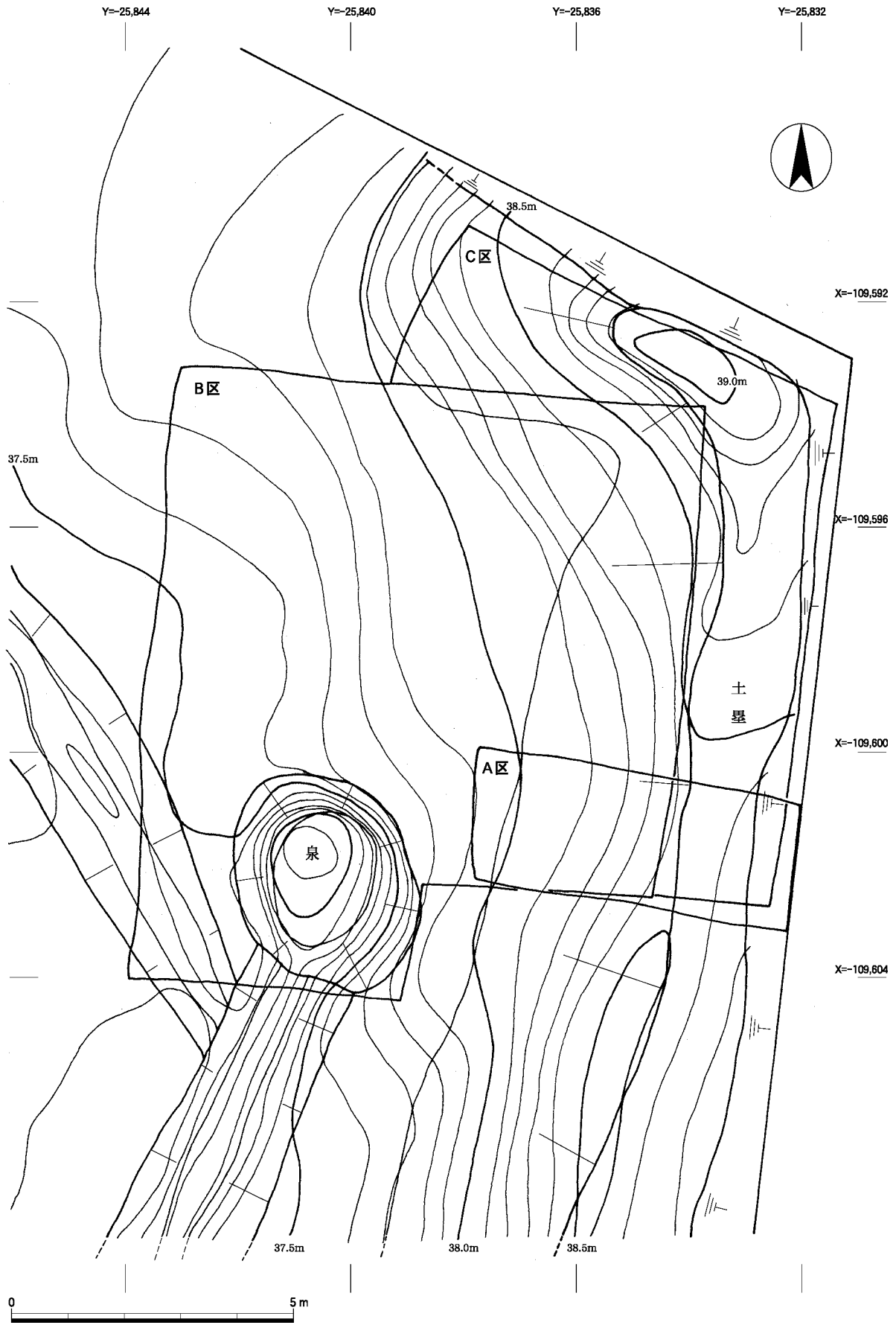


図7 地形測量および調査区配置図(1:100)

する。この黒褐色砂泥は東半部（土塁の下層部分）にのみ残存している。調査区の西半にはやや時期の新しい自然流路があって、にぶい黄褐色から褐色の砂礫が堆積する。遺物包含層の下層は黄褐色砂泥あるいは褐色砂礫の地山となる。

### （3）遺 構（図9、図版1～3）

本調査では、弥生時代後期から古墳時代初期と平安時代中期後半以降の遺構を検出した。

#### 1）弥生時代後期から古墳時代初期の遺構

土壌と遺物包含層、自然流路がある。大きく調査区内の東半分が遺物包含層であり、西半分は砂礫層を主体とした南方向への大きな自然流路の一部と考えられる。

土壌SX15（図8） 泉SX1の掘形に西半部を切り込まれる。明確な掘形は持たないが南北約3m・東西1m以上の範囲の黒褐色泥砂を主体とする埋土よりなっており、深さは検出面から約0.5mであった。検出面で土器が数個体分まとまって出土したほか、粘板岩製の石器未製品が1点出土した。泉SX1の現地保存のため、遺構の東半部のみでの調査にとどめたので、全容は不明である。

遺物包含層 南北方向の溝SD2以東、境内の東端までの土塁の下層で検出した。層厚は0.2m前後あり、黒褐色泥砂の堆積である。遺物の出土状況には場所による粗密がみられ、全体としてあまり遺物を多く含まない。

流路 調査区の西半部は平安時代後期の遺構成立面下が砂礫層を主体とした堆積層となっており、南方向に流れる自然流路の東岸にあたると考えられる。比較的磨滅の少ない弥生時代後期から古墳時代初期の土器が少量出土する。後世まで当地に水が豊富であったことと密接な関連があると考えられる。



図8 土壌SX15遺物出土状況

表1 遺構概要表

	時 代		遺 構
1期	弥生時代後期 ～古墳時代初期	弥生第V様式 ～庄内式期	土壌SX15、遺物包含層、流路
2期	平安時代中期	Ⅲ期(中)～Ⅵ期	石敷遺構SK3、泉SX1、溝SD7・8・10・11、 柱穴P5・12
3期	鎌倉時代前期	Ⅵ期(中)～	泉SX1、溝SD2・10・11、柱穴P5、土塁

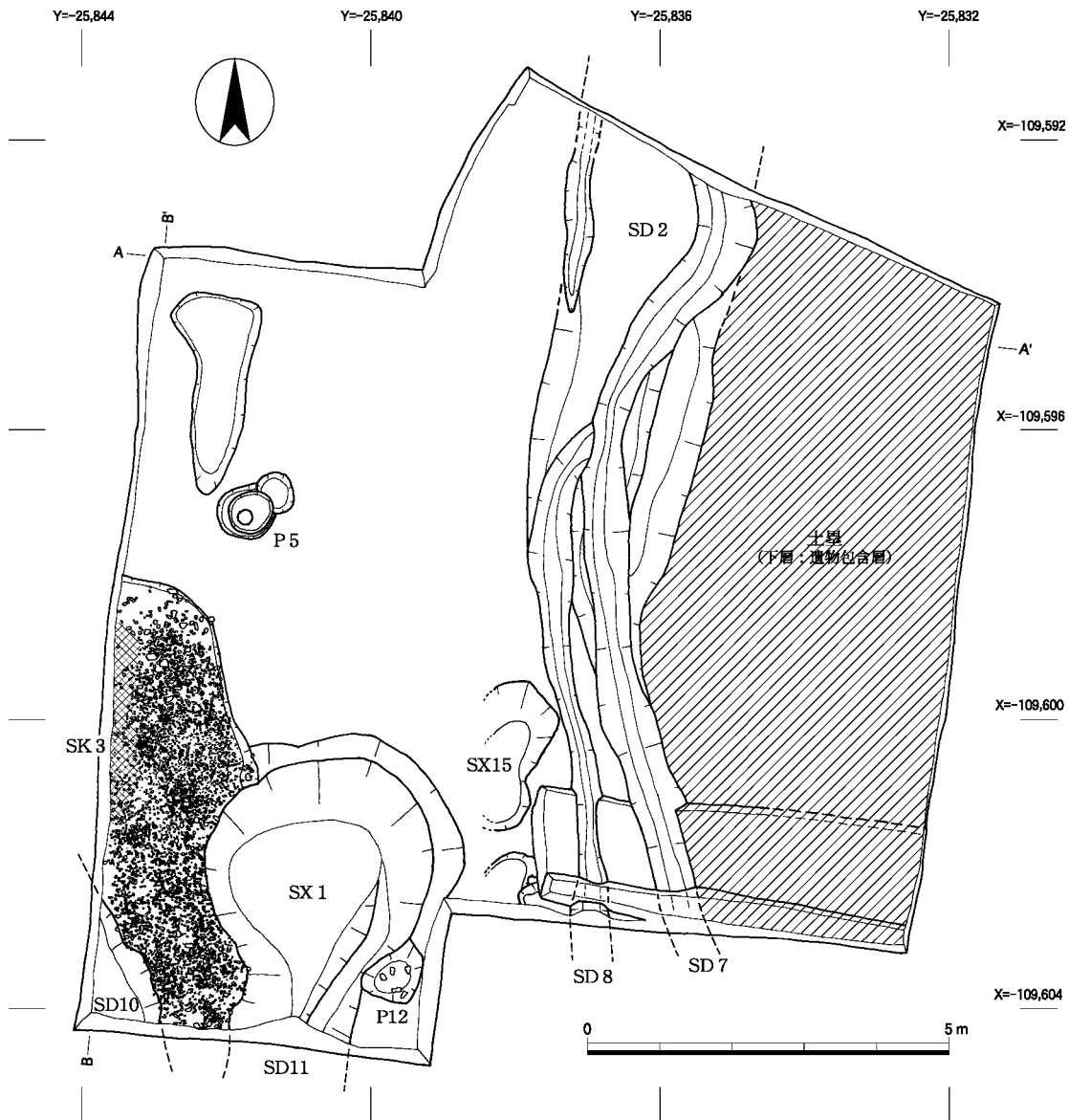


図9 調査区平面図(1:100)

## 2) 平安時代中期後半以降の遺構

泉(SX1)、石敷遺構(SK3)、溝(SD2・7・8・10・11)、柱穴(P5・12)、土塁などがあり、泉SX1を中心とした木嶋坐天照御魂神社に関連する遺構群である。

石敷遺構SK3 泉SX1の西肩に取りつくように東西2m・南北6mの範囲を検出した。石敷は2cm前後を主体とした10cm以下の礫を敷き詰めて作っている箇所と、細かい砂利を突き固めて路面状を呈している箇所(図9の格子網掛け部分)があり、灰色細砂に覆われて埋没することから、この上面に水を流した施設であると考えられる。遺構は調査区外、西に拡がっており、全貌を明らかにできなかった。石敷上面より平安時代中期後半から鎌倉時代前期の土器小片や瓦などが出土している。

泉SX1(図11、図版1・2) 平面円形、直径約3m・深さ約1mの掘込みで、底面は湧水層

と考えられる砂礫層に達する。泉SX 1は調査掘削前に、地表面・腐植土上面で確認した円形凹みである。この泉SX 1は当初の姿は不明であるが、元来湧水のあった場所に掘削された遺構であると考えられる。石敷遺構SK 3の石敷が成立した後に掘削されたか、あるいは一体のものとして作られたかについては判断できないが、のち周辺が整地された鎌倉時代前期には周囲に土手状の盛土が設けられたと考えられる(図11の右)。最終的にはほぼ中央に円形の榦が据えられ、腐植土に覆われていたが近年まで豊富な湧水があって、溝SD11によって南へ水を流していたようである。遺物は多くないが、平安時代から現代に至るものが出土した。

溝SD11 泉SX 1の南に取り付く幅1.5mの断面「V」字形の溝で、湧水を南へ流していたことがわかる。この溝は境内を蛇行しながら南へ続いている様子が、腐植土上面に残る溝状の凹みからわかる。

溝SD10 また溝SD11には調査区外で北西方向から同様の溝SD10が取りつく。北西方向に溝SD10の延長と考えられる溝状凹みが腐植土上面でも確認でき、この上流にも泉SX 1と同様の泉状遺構と思われる円形凹みが確認できる。

柱穴P12 泉SX 1の南東肩部に柱穴P12を検出した。直径0.6mで、ちょうど泉SX 1に溝SD11が取りつく箇所の東側に位置する。調査区内には対応する柱穴は検出できなかった。この柱穴は泉SX 1の最初期に伴って設けられたと考えられ、のちに設けられる四周の土手に先行する。

柱穴P5 石敷遺構SK 3の北で検出した。径0.5mの円形掘形に、径0.2mの柱痕を確認した。これに対応する柱は本調査では検出できず、建物の一部かどうかは確認できなかった。

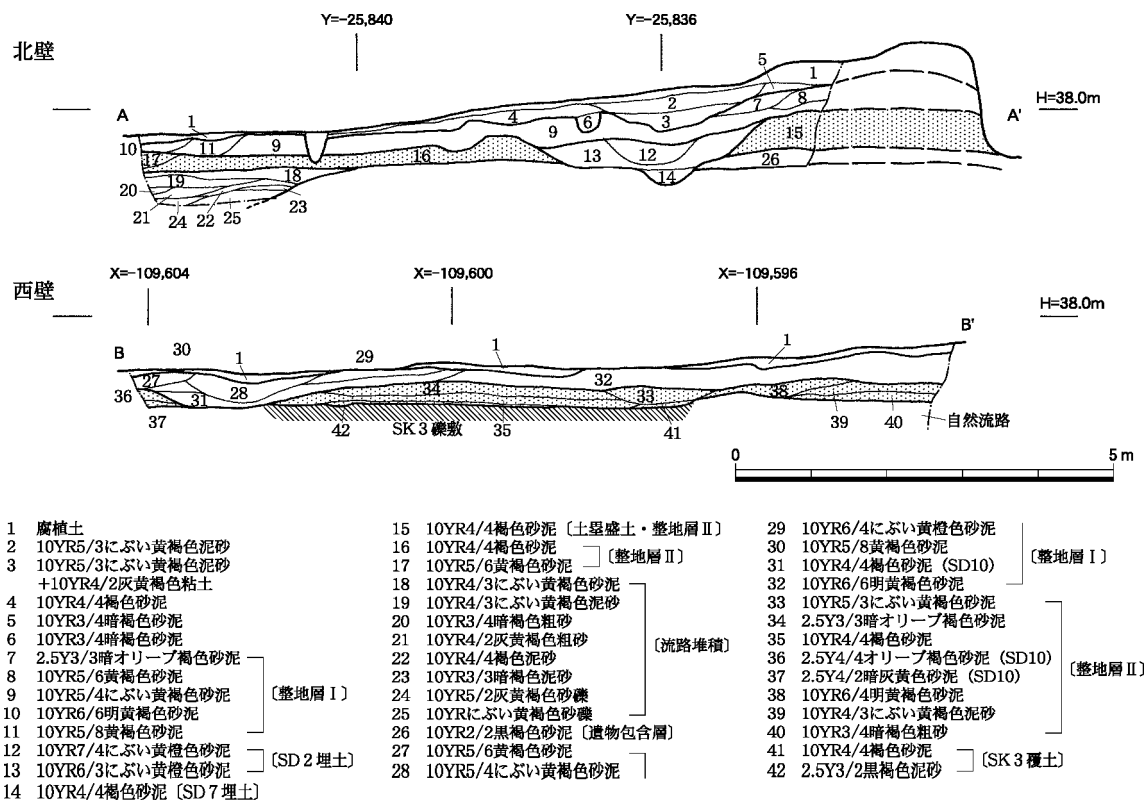


図10 調査区断面図(1:100)

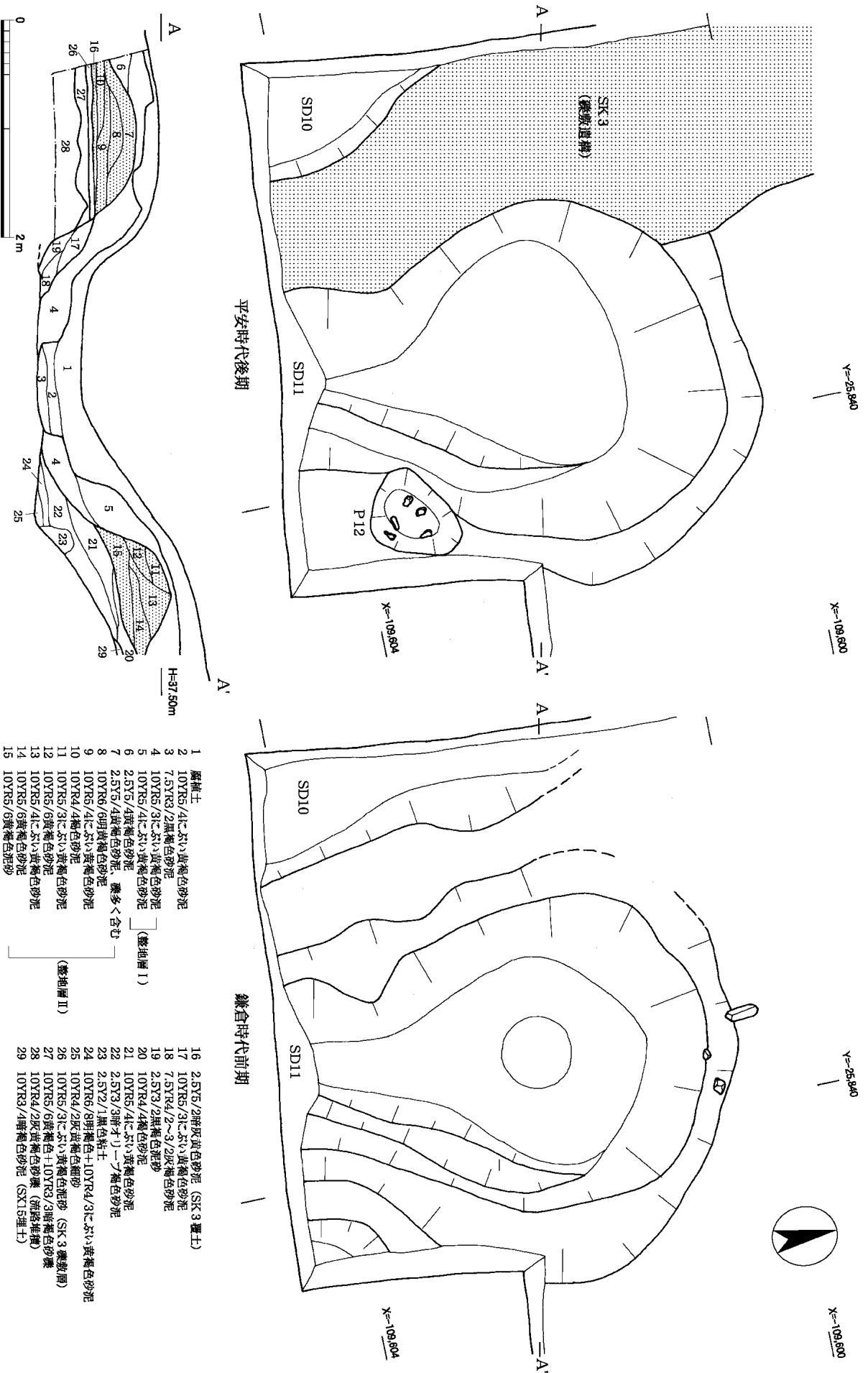


図11 泉SX 1実測図 (1:50)



溝SD7・8 溝SD2の底部で検出した。溝SD8が溝SD7に先行するが、さほど時期差がないものと考えている。溝SD7は幅0.7m前後・深さ0.2～0.3m、溝SD8は幅0.4m・深さ0.2mで、いずれも蛇行して南に流れる。

溝SD2 幅約2m、土塁の西側を並走する南北方向の内溝である。当初溝の機能を果たしていたが、徐々に埋まって何度も掘り直され踏襲されていたと考えられる。

土塁 現境内の東端を限る南北方向の土塁、幅3～4m、道路面からの高さは当初0.5m程度であったが、のちに1.5mまで盛土がなされる。溝SD2がこの土塁の西に側溝状に南北に走る。東側は現道路に切られていると考えられる。

## 4. 出土遺物の概要

遺物は整理用コンテナに6箱分出土した。大半は弥生時代後期から古墳時代初期に属する土器類である。

### (1) 弥生時代

石器未製品が1点、土壌SX15から出土した。石器未製品(図12-1、図版4)は5GY7/1明オリブ灰色の粘板岩で、両面とも打撃によって荒割りを施している。断面は稜をもつ菱形に近い状態から、稜を削ぎ落として平坦な石材を得ようとしていたとみられ、石包丁の未製品ではないかと考えている。幅3.7cm、長さ14.2cm、厚さ1.7cm。

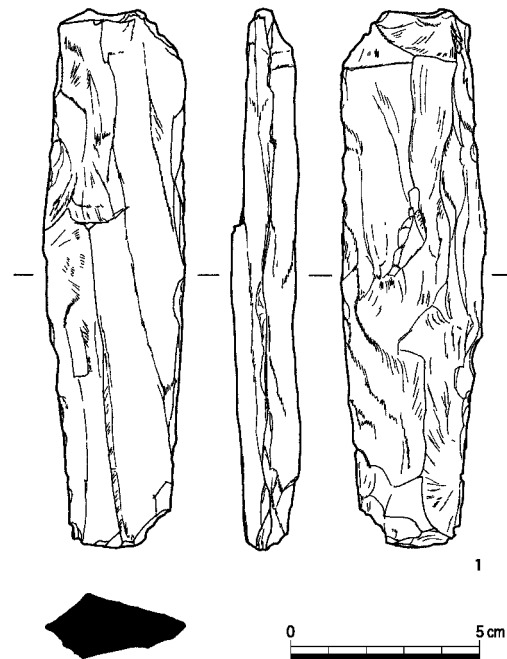


図12 土壌SX15出土石器実測図(1:2)

表2 遺物概要表

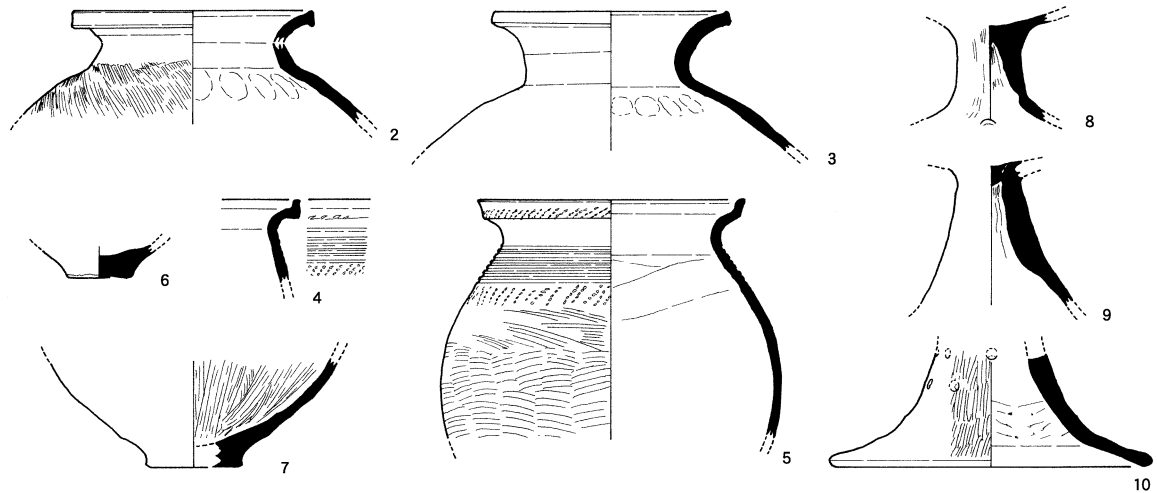
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	石器(未製品)	0箱	石器未製品1点	0箱	0箱
弥生時代後期 ～古墳時代初期	弥生土器あるいは古式土師器	3箱	弥生土器あるいは古式土師器20点	2箱	0箱
平安時代中期 ～鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦	2箱	土師器8点、須恵器1点、軒平瓦1点	2箱	0箱
江戸時代以降	磁器、ガラス製品、金属製品、瓦	1箱	銅製飾り金具1点	0箱	1箱
計		6箱	32点(1箱)	4箱	1箱

## (2) 弥生時代後期から古墳時代初期

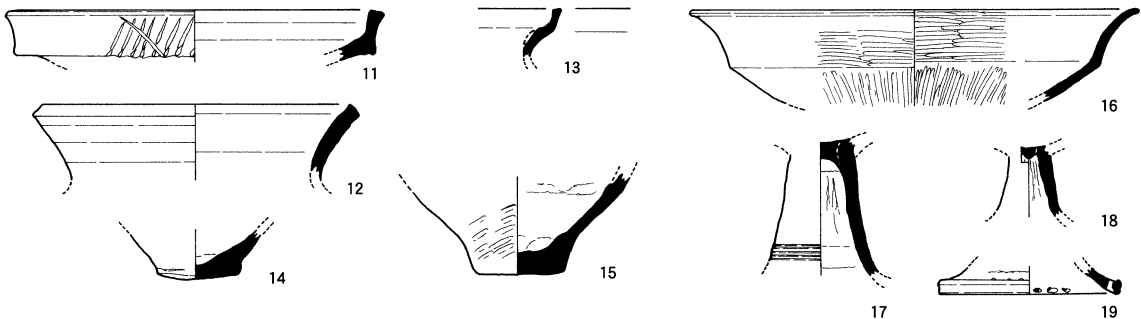
当該期の遺物は土壌SX15、遺物包含層、流路のほか後世の遺構に混入して出土している。いずれもその全容がわかる個体はなく、時期を確定するのが難しいため、弥生時代後期から古墳時代初期という表記にとどまった。古い様相と新しい様相が混在しており、弥生時代後期からいわゆる庄内式併行期までとある程度の時間幅をもつと考えている。

土壌SX15(図13-2~10、図版4) 土壌SX15からは弥生時代後期から古墳時代初期のまとまった土器が出土した。壺・甕・高杯などがあるが、いずれも残存状況は良くない。壺には広口壺(2・3)、長頸壺がある。広口壺2・3はともに体部から短く外反する口縁部を有し、体部は球形に近いと思われる。甕では受口状口縁で口縁部や頸部を加飾する「近江」系のものがある(4・5)。4は破片が小さく口縁径が明らかにできなかったが、口縁部は強く屈曲し端部が外反する。口縁部屈曲部に刻目、頸部にはクシ状工具による横線文、刺突文が施される。5は口縁部の屈曲は弱く、体部はやや扁平な球形を呈する。体部下半は平行条線のタタキによって成形されており、上半はハケメを施す。加飾はいずれもクシ状工具により施されている。6は甕、7は壺

SX15



遺物包含層



流路

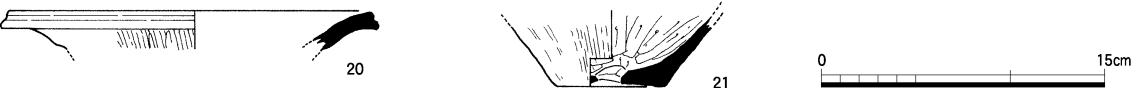


図13 弥生時代後期から古墳時代初期の土器実測図(1:4)

の底部である。高杯は脚部の残存状況がよく、柱部（8・9）と裾部（10）がある。8は柱部が筒状で裾部が大きく開くもの、9は「八」字状に緩やかに開くもので杯部底面に円盤充填の痕跡が明瞭に残る。10は透孔が上下二段それぞれ八方向に穿たれている。なお、高杯の杯部が1点あり、これは後に述べる遺物包含層出土の16と同一個体と考えられる。

遺物包含層（図13 - 11～19、図版4） 壺・甕・高杯などが出土した。壺には加飾の複合口縁壺（11）と直口壺（12）がある。11は口縁端部を上方に拡張し、外面にはヘラ状工具による斜線のち重なるように屈曲部に刻目を施す。反対方向の斜線が施され、鋸歯文状の文様である可能性もある。12は短く外上方へ開く壺口縁部である。甕には受口状口縁の「近江」系のものがあり、13は小片であるため口縁径が計測できなかったが比較的大型の甕であろう。底部は14が壺のもの、15は甕のもので平行条線タキにより成形され、接合の痕跡が残るが剥離して上端は擬口縁状を呈している。高杯には杯部（16）、柱部（17・18）、裾部（19）がある。16は内弯気味に開く底部から明瞭な稜をもって口縁部が大きく外反する杯部である。内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。17は外面縦方向のヘラミガキ、柱部と裾部の境にはクシ状工具による横線文が施される。受部底部は円盤充填がなされ、柱部内面から指で強く押さえられる。18は小型の高杯の柱部で、明瞭ではないが面取りが施されている。19は脚裾部である。端部の上部には外面から内面への穿孔（径0.2cm）が密に施され、端部はやや拡張される。これらのほかに図化できなかったが、いわゆる生駒山西麓産胎土の大型の壺の体部がみられる。

流路（図13 - 20・21） 壺・甕・高杯などがある。壺には広口壺（20）がある。端部をやや下方に拡張し、端面には沈線が巡る。口縁部外面には縦方向のヘラミガキが施される。21は甕の底部である。外面はハケメ、内面は放射状のヘラケズリが施される。底部中央には、焼成後に外面から穿孔がなされ、甑として使われていたと考えられる。

### （3）平安時代中期以降

当該期の遺物は、泉SX1、石敷遺構SK3、溝SD2、その他整地層などから出土した。土器類はいずれも小片で、図示できたものは石敷遺構SK3出土土器のみである。いずれも図化に際しては機械的に反転せざるを得なかった。

石敷遺構SK3（図14 - 22～30、図版4） 石敷遺構は現地保存されることとなったため、調査は石敷上面のみの調査となったが、石敷上面からは土師器、須恵器、黒色土器、瓦などが出土した。土師器には皿（22～28）・羽釜、須恵器には甕・鉢（29）、黒色土器には椀がある。22は薄手の「て」字状口縁の土師器皿A類、29は口縁端部は内外に丸く肥厚し体部上半は内弯する須恵器鉢で篠産の鉢C類に属する。10世紀中頃（期古～中段階）とみられ、石敷遺構が作られた時期を示している。一方、土師器小型皿（25～28）・中型皿（23）・大型皿（24）は13世紀前半（期中段階）で、石敷遺構の埋没した時期を示すと考えられる。軒平瓦（30）は内行唐草文、外区の珠文は密に配されている。還元焼成され須恵質である。瓦当面左上端にヘラケズリが施され、文様が失われている。

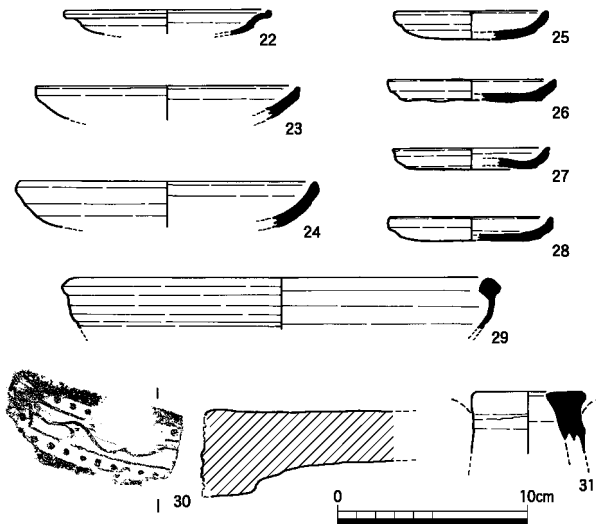


図14 石敷遺構SK3・泉SX1出土土器・瓦実測図  
(1:4)

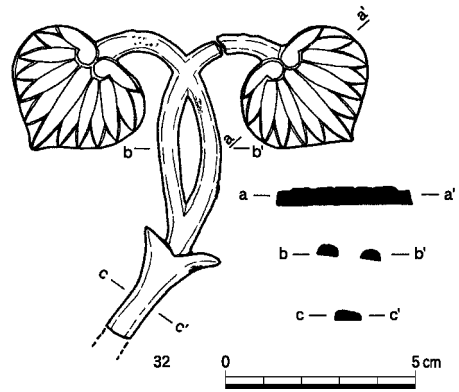


図15 泉SX1腐植土層出土飾り金具実測図  
(1:2)

泉SX1 (図14 - 31、図15 - 32、図版4)  
泉SX1からは土師器、須恵器、施釉陶器、

焼締陶器、磁器、瓦、金属製品など出土量は多くないものの、多様な遺物が出土した。年代的にも幅広いもので、近年まで機能していたことを裏付ける。図化し得たのは、土師器高杯と金属製品のみである。土師器高杯(31)は柱部上端部、杯部との接合部に当たるものと思われる。上端は剥離して擬口縁化しており、外面には赤色塗彩が施される。平安時代のものとみられる。金属製品(32)は銅製の飾り金具で、意匠は双葉の茎が交差する「立葵」である。文様は表面のみで、裏面は平坦となっており、厚さは葉部分で0.5cm、茎部分は0.2~0.3cmである。立葵は木嶋坐天照御魂神社の紋である。腐植土層から出土しており、近年のものであろう。

## 5.まとめ

### (1) 遺構の変遷 (図16)

本調査で検出した遺構は、大きく弥生時代後期から古墳時代初期と平安時代中期以降に分けられ、前者は和泉式部町遺跡、後者は史跡木嶋坐天照御魂神社(蚕ノ社)境内に関連する遺構である。便宜的に弥生時代後期から古墳時代初期の遺構群を1期、平安時代中期以降の遺構群は整地層が施された段階(鎌倉時代前期)で大きく様相を変えると考えるので、その前を2期、後を3期とした。

1期 弥生時代後期から古墳時代初期の遺構群で、土壌SX15・遺物包含層・流路である。「層序」の項でも述べたように、本来は全域が遺物包含層である黒褐色砂泥に覆われていたと考えられるが、調査区西半には南流する流路があり遺物包含層の堆積はみられない。土壌SX15は、流路の東肩に設けられた土壌である。

2期 平安時代中期以降、整地層が施される鎌倉時代前期以前の遺構群である。まずその中でも最も古く遡るのは石敷遺構SK3で、平安時代中期後半に形成されたとみられる。泉SX1は

この石敷遺構SK3に切り込んでつくられ、当初はもっと規模の小さな湧水であったものが、検出したような形態に時間をかけて改変されたものと考えられる。泉SX1の南には溝SD11が接続して湧水を南へ流しており、接続部の東肩には柱穴P12があり、何らかの柱が立っていた。溝SD7・8は蛇行して南流する。

3期 整地層 が施され、それに伴って形成された鎌倉時代前期以降の遺構群である。2期の石敷遺構SK3は整地によって埋められ、泉SX1の四周には土手状の盛土がなされて、ほぼ調査で検出されたような形態が形作られたと考えられる。境内の東端には南北方向の土塁が形成され、その内側には溝SD2が並走して南に続く。その後、整地層 や表土（腐植土）によって覆われるが、ほぼ3期の段階には現況が形成されていたと考えられる。

## (2) 遺構群について

1期の遺構群は、時代的にも内容的にも和泉式部町遺跡の一部と考えて差し支えなく、これまで当社の西半までであった遺跡範囲を東へ広げて考える必要がある。ただ、地形的にみて境内東側道路以東は御室川の氾濫原であり、本調査地点は和泉式部町遺跡の立地している段丘上の東端部にあっており、これ以上東へ広がることはないものと考えられる。

2・3期の遺構群は当社に関連する遺構群であり、それらのうち、泉SX1とその湧水を南に流す溝SD11は当該期の当社の様子を考える上で重要である。溝SD11はその南延長部が調査区外の表土（腐植土）

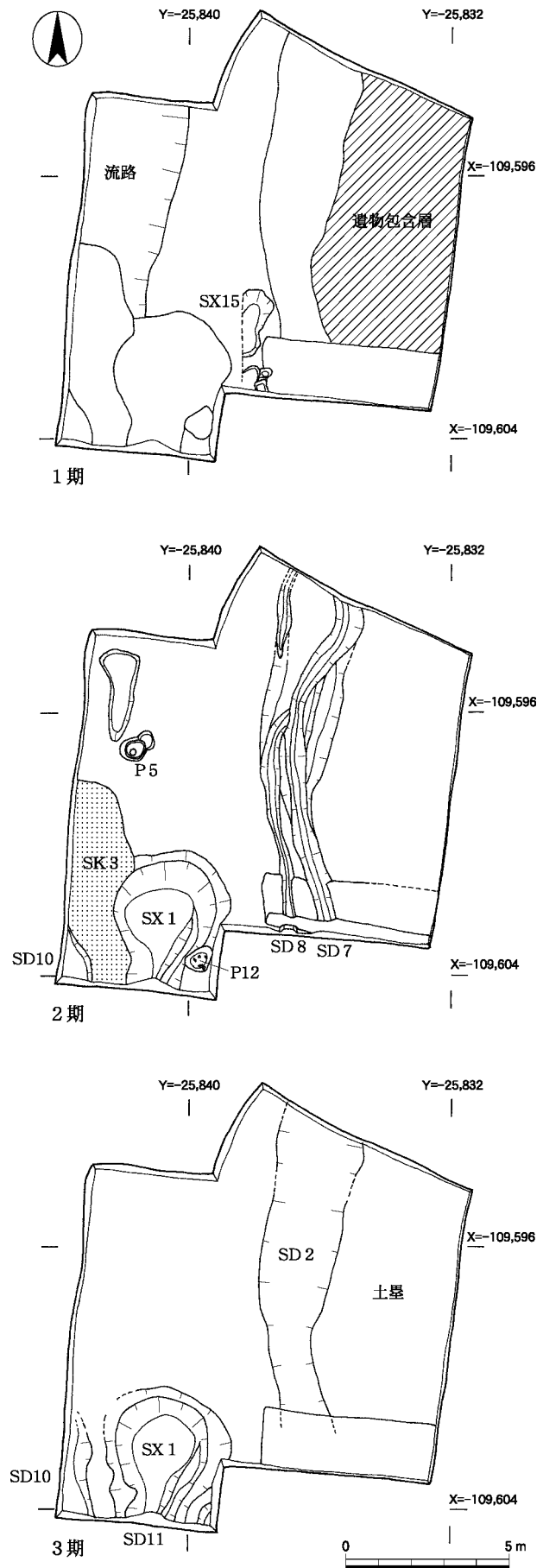


図16 遺構変遷模式図(1:200)

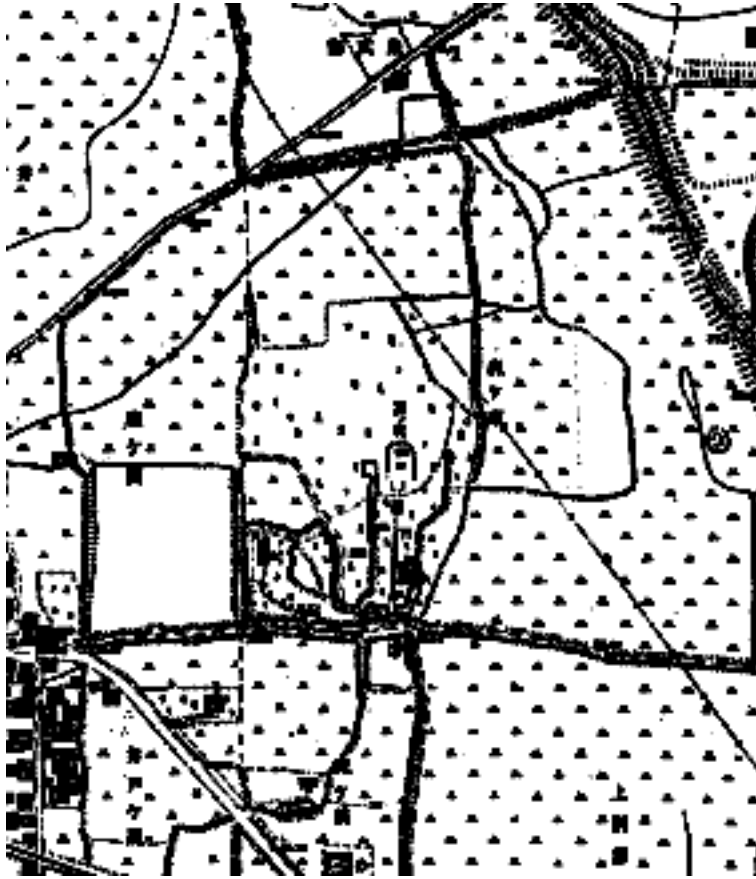


図17 大正期三千分一地形図(「花園」部分、1 : 5,000に調整)

上面でも溝状凹みとして、境内の東側を蛇行しながら約50m以上続いており、途中には泉SX1のような円形凹みが何箇所か確認できる。このような状態から、近年まで機能していたと考えられ、大正期に作成された「三千分一地形図」(図17)に描かれた当社をみれば、本殿の西に現在と同様「元糺の池」があり、本殿を挟んだ東側には円形の凹みと南に続く溝が描かれている。これは位置的にみて本調査で検出した泉SX1・溝SD11とみて間違いのないであろう。また、調査区の北西方向には溝SD10の延長とみられる溝状凹みが続いていることは先に記した。また、

現在では涸れてしまっているが、およそ20年程前までは近辺の湧水も豊富であったといい、「元糺の池」も自噴して川の如く流れていたことなどを考えれば、本調査の泉SX1もそのころまで実際に湧水があって、水を南へ流していたと思われる。先に触れたように境内東には現在も他に円形や溝状の凹みが確認でき、各所で泉から水が湧き南へ流していた様子が想像される。これら境内の湧水は境内の南端・鳥居の南側にあった池に注いでいたようである。西側にある「元糺の池」もこのような泉の一つが後に神聖化され、現在のような形になったのではないだろうか。

本調査では、以上に記したように「元糺の池」のような泉と溝からなる遺構群が境内に他にも存在しており、少なくとも平安時代中期にはSK3のような石敷遺構が水の祭祀に関連して形成されていたことが明らかとなった。そして、これら当社に関わる平安時代中期以降の遺構における大きな変化は、整地層が施される時期の前後にあり、それは石敷遺構SK3の埋没の時期である鎌倉時代前期ごろとみている。具体的には、承久の変の際に焼失した社殿の再興に伴う整地ではないかと考える。

本調査は境内の北東隅の極く一部の調査に過ぎず、調査面積も少なかったものの、史跡木嶋坐天照御魂神社(蚕ノ社)境内に対する最初の考古学的調査として一定の成果をあげ得たと考えている。

## 註

- 1) 一説には、広隆寺の建設とともに604（推古天皇十二）年に勧進されたと伝える。（神社鳥居西の木製看板）
- 2) 927（延長五）年十二月撰上の『延喜式』巻九「神祇九 神名上」に葛野郡廿座の一つに挙げられている。
- 3) 『続日本紀』大宝元年四月三日条  
勅。山背国葛野郡月読神。樺井神。木嶋神。波都賀志神等神稻。自今以後。給中臣氏。
- 4) 『日本三代実録』の875（貞観十七）年、877（元慶元）年など。
- 5) 『日本三代実録』貞観元年正月廿七日条  
廿七日甲申。京畿七道諸神進階及新叙。惣二百六十七社。（中略）從五位下樺井月読神。木嶋天照御魂社。和支神並正五位下。...
- 6) 『梁塵秘抄』巻二  
金の御嶽は一天下、金剛蔵王釈迦弥勒、稻荷も八幡も木嶋も、人の参らぬ時ぞ無き
- 7) 『吾妻鏡』、『承久記』、『承久兵乱記』など1221（承久三）年六月十五日の記述。
- 8) 現在のように下鴨神社の森を「糺の森」と呼ぶ以前は、この呼び名が示すようにもと木嶋社にあった糺の森が後に下鴨神社に移ったという。木嶋社の森を「元糺の森」、この神泉を「元糺の池」と呼んでおり、夏の土用の丑の日にこの泉から流れる水に手足を浸すと諸病に良いとされている。
- 9) 『都名所図会』巻之四 右白虎（『新修 京都叢書』第六巻 臨川書店 1967年）所収。
- 10) 辻 裕司・菅田 薫・前田義明「和泉式部町遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 11) 久世康博「森ヶ東瓦窯跡（UZ18）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
- 12) 平田 泰「森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡」および平田 泰「広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡」いずれも『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年

## 参考文献

- 『史料 京都の歴史』（第14巻 右京区）平凡社 1994年  
京都市埋蔵文化財調査センター編『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 1996年  
加納敬二・小檜山一良ほか『京都嵯峨野の遺跡 広域立会調査による遺跡調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年

# 圖 版



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきこのしまにますあまてるみたまじんじゃ (かいこのやしろ) けいだい							
書名	史跡木嶋坐天照御魂神社 (蚕ノ社) 境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-15							
編集者名	高橋 潔							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年12月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきこのしまにます 史跡木嶋坐 あまてるみたまじんじゃ 天照御魂神社 (かいこのやしろ) けいだい、 (蚕ノ社) 境内、 いずみしきぶちょう 和泉式部町 いせき 遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 うずまさもりがひがしちょう 太秦森ヶ東町	26100	C722        787	35度 00分 42秒	135度 43分 01秒	2002年9月 2日～2002 年11月19日	118㎡	消防用防 火槽設置 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
和泉式部町 遺跡	集落	弥生時代後期～ 古墳時代初期	土壌、遺物包含層、 流路	弥生土器あるいは古式 土師器、石器未製品	史跡木嶋坐天照御 魂神社 (蚕ノ社) 境内に関連する遺 構として、平安時 代中期以降の石敷 遺構や泉・溝、土 塁などを検出した。			
史跡木嶋坐 天照御魂神社 (蚕ノ社) 境内	史跡	平安時代中期後 半～鎌倉時代前 期	石敷遺構、泉、溝、 土塁	土師器、須恵器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-15  
史跡木嶋坐天照御魂神社 (蚕ノ社) 境内

発行日 2002年12月27日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961